文化庁月報

1981-1

No.148

【表　紙】

バラをつけた女

ピエール=オーギュスト・ルノワール画

解説は20ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

も く じ

日本「文化外交」の忘れられた１人の先駆者
………アイバン・ホール　4

私と中国の歴史………………………………井上　靖　7

〔随想〕
蓮華草……………………………………鹿海信也　10

〔報告〕
インドを垣間見る
——昭和54年度文部省在外研究員日記抄録——
………榮樂　徹　12

文化庁ニュース

昭和55年度(第35回)芸術祭
芸術祭大賞・同優秀賞決まる………………………15

日本芸術院新会員の紹介……………………………16

重要文化財(建造物)の新指定
——文化財保護審議会の答申——……………………17

アルベルティーナ所蔵
ヨーロッパ版画名作展………………………………18

昭和55年度宗教法人実務研修会終了、
昭和56年度開催予定県決定…………………………19

<新設法人紹介>
財団法人煎茶道東阿部流……………………………20

祭礼歳時記シリーズ　⑩
２月の祭り——国東の修正鬼会——……高橋秀雄　21

我が県の文化行政
生きた巨大な文化財・
日光杉並木街道を中心とした栃木県の文化行政
………武井　宏　23

海外文化行政事情シリーズ　⑦　〔ＣＤＩ報告書から〕
イギリスの美術施設………………………松野　精　26

著作権シリーズ(20)
著作権の制限
——美術・写真・建築の著作物の利用——………29

国立劇場ニュース……………………………………31

日本「文化外交」の忘れられた一人の先駆者

明治初期から「文化大使」の役を演じた 駐米・清・英公使森有礼の話

アイバン・ホール
（日米友好基金事務総長代理）

I

日本の「文化外交」の本格的な出発点を確定しようとすれば、それはおそらく一九七二年の国際交流基金の設立から、あるいはまた、一九三四年に溯って国際文化振興会の創立からである、といえよう。もちろん、個人レベルでの活動には、芸術交流における岡倉天心（一八六二～一九一三）、また、思想交流における新渡戸稲造等々の勝れた業績があげられる。が、政府の外交機関が管理したり、国民の税金を使って運営したりして自分の国を海外に紹介する、といった意味での日本文化外交というのは、欧米諸国と同様に、一九三〇年代、すなわちあの危機をはらんだ時期から始まったのである。英国のBritish Councilはナチドイツの宣伝活動に対抗するために一九三四年に設けられ、国際文化振興会の設立も一九三三年の日本の国際連盟からの脱退に伴って、次第に深刻になりつつある世界の中の日本の孤立化に対応するためであった。戦後はじめて本格的になってきた米国の文化外交も、共産主義の挑戦に大きな拍車をかけられたのも事実である。とにかく、国と国との間の文化的な交流は元々非常に有益なもののはずであるのに、国家レベルでそれを促進するに当たっては、純粋に啓蒙的な動機からよりも国際的な危機感から生まれるのが世の常であり、また、海外への「自己紹介」の中にも、「広報」的な活動が「文化」に優先されがちである。下手をすると、広報は宣伝に走り、文化は政治的な目的に歪められる等の諸弊が出る。しかし、もっとソフィスティケートした場合（いいかえれば、もっと理想的な場合）、広報は正確な情報を提供し、文化外交は純粋に芸術・教育・学問的な基準によって運営され、またそれを管理する文化担当外交官も、その仕事を官僚的な立場からだけではなく、楽しくも進取の気象をもって行うのである。

II

こうしたまじめな文化外交が、早くも明治初期から、米国・中国・英国で日本の全権公使を勤めていた森有礼（一八四七～一八八九）によって活発に行われていたことは、余り知られていないだけでなく、これは近代日本外交史の奇談の中に入れるべき話でもあろう。森は、在ワシントンの時（一八七六～一八七三）、後に在北京の時（一八七〇～一八七七）、つづいて在ロンドンの時（一八八〇～一八八四）にも一貫して、公使の本職の傍ら、あたかも「文化大使」ごとき役も演じたりして、現代外交用語でいわれる「報道文化担当官」のように、報道、学問、教育、芸術等の分野にわたって、一生懸命に外国の指導者や国民に向かって日本の紹介に努めたのである。近代日本最初の文部大臣（一八八六～一八八九）であり、また明六社や明六雑誌の創立

者（一八七三）として一番よく知られている森は、明治の啓蒙運動や明治政府の開明官僚派の一人として、もちろん日本の国民に対する外国の文明の紹介にも熱心であったが、福沢諭吉等と違って、明治初中期日本の思想家や政府高官の中でただ一人の、自分の国を外国とくに英米に対して理解させようという努力を払った人物であった。文化外交こそ正に、その当時の国際危機感に覆われた明治日本にとって大事な課題であったのであるが、政府の関心は国内で行われる「富国強兵」政策や鹿鳴館の舞踏会等に代表されていた西洋「まね」に集中して、あえて海外において日本の売り込みをすることは全然考えていなかった。海外で活動していた明治の日本人の多くが、あるいは自分の国の何でも謝るという自己軽視的な、あるいは西洋人にはどうせ日本のことなど分かるはずがないという閉鎖的な、あるいは西洋には教えないで学ぼうとしかしないという一方的な態度をとっていた。元々相互的な交流の生まれにくいこういう世の中の大勢を乗り越えて、森は何かの理由で次のような現代的な文化外交を遂行したのである。

III

二十四歳の若年でワシントンに到着した森公使は、間もなく報道や文化（その中には教育、学問、芸術等が含まれる）担当官らしい活動を開始した。

報道担当としての森は、まず一八七二年に米国を訪れた岩倉使節団（岩倉具視、遣外使節）の受け入れ準備や斡旋だけでなく、使節団のPRとして、到着に先立ってワシントン・スター紙等米国の主な新聞に記事を載せたり、また使節や一般日本の紹介のために、日本公使館専用アメリカ人秘書のCharles Lanman氏に「The Japanese in America」という本を書かせたり、さらには米国議会の依頼で上・下両院の外交委員会・予算委員会に出て、最近の日本の政治・社会情勢についての質問に答えた。明治新政権に対して反動分子が反乱を起こしそうだという東京からの噂が米国の新聞に出ており、それによって日米修好通商条約をはじめ、維新以後の日本の開国や近代化等の諸方針が危うくなるのではないかという心配が、当時アメリカ指導者の中を支配していた。これに対して森は雄弁な英語で反論して、明治政府の安定性と信頼性と進歩主義をうまく弁護したのである。森が英文の日本政府あての覚え書き「Religious Freedom in Japan」（「信仰自由論」一八七二）を著した動機も、政府に信仰自由の必要性を説き勧めるためだけでなく、先と同じ意味でアメリカ人に向かって、日本における宗教の「自由化」への確実な動きを示し、安心させるところにもあった。また、明治社会の進歩性を主張するためより「PR的」なジェスチャーとして、森はワシントンにあるSmithsonian（スミソニアン）国立博物館に、三百年前に作られた日本刀を贈呈して大きな話題を起こした。なぜかというと、この刀は、森が一八六九年に東京で「廃刀論」を唱えたのに対して、これに反発し、この刀をもって森の暗殺（未遂）を謀っていた人のものであって、その人は後になってそのことを反省して、渡米した際日本公使館を訪れ、森に謝って暗殺されるはずだった当人に贈った刀であったからである。

十年余りたった一八八四年、駐英公使をやめる前の日に、森はロンドン一流の新聞 Pall Mall Gazetteのインタビューに応じ、長文の記事で東洋の軍事・戦略的な情勢をはじめ、明治の憲政問題や日本女性の立場など、幅広く最近の日本の事情を語っている。日英文化の比較もこの記事の中に試み、キリスト教に親近感をいだいていた森は、キリスト教道徳を誇りにした英国民に向かって、ロンドン全人口に占める乞食の比が東京のそれの十倍であることをあげて、家族を中心とした相互助け合いに基づく日本の社会道徳の優越を主張した。日本人を相手に堂々と西洋文明の欠点を突く日本の思想家は大勢

いたが、あえて英語で外国の大新聞に、さらに外交官の身分をもってそれを言える日本人は当時森以外にはいなかっただろう。もっと重要な活動としては、森は、現代の報道官と同様、相手政府の高官とだけでなく、外交問題の裏に潜む民間とくに経済界の団体とも連絡をとり、不平等条約の改正に消極的であった北英国繊維産業の中心都市Bradford市の商工会議所と活発な文通を続けていた。

IV

　こうした森の西洋人に対しての積極的かつ開放的態度は、彼の文化担当官の面にも顕著に現れていたのである。森の一番よく知られている業績は、彼にとってある程度義務的であった教育関係のもので、その例として、米国での日本留学生の監督、D・Murray氏等文部省お雇いアメリカ人教育者の募集、欧米諸国教育制度についての調査等があげられる。しかし、森はこれらも任務以上に熱心にやり、またこれらを機会に幅広い知的な活動にまで及んで、一流の英米人学者、思想家、教育者との個人的な付き合いだけでなく、日本との学術・文化交流の拡大そのものも図っていた。

　一般日本文化の紹介としては、ワシントン時代の森は日本の詩の英訳を依頼したり、日本からの書籍の輸入の便宜を米税務局と交渉したり、また彼の「Education in Japan」の序文として五十七枚に及ぶ日本人による最初の英文日本史を書いたりしたのである。現地知識人との交際も文化担当官の仕事であり、森は教育制度調査の関係で米国一流大学の学長たちと文通をし、英国の主要な思想家H. Spencer、T. Huxley、M. Arnoldとも親密な間柄であったが、目立つことは、森が単なる職務や社交上の関係を越えて、明治啓蒙運動家の一人として自分の思想や哲学や歴史観も持っており、それによって本人自身が参加者の立場になって思想交流の主役も演じたことである。例えば森はH・スペンサーをはじめ英国の学者・思想家の集まるアッシーニアムクラブの会員となって、ほとんど毎日クラブに顔を出して、人をつかまえては思想的な討論などをして、外交官としては珍しい存在であった。社会発展史の一例として日本に対して深い興味を持っていたスペンサーの日記の中に森への言及が多くあり、スペンサーの哲学に強く影響を受けた森は、伊藤博文、金子堅太郎等当時の日本の指導者への紹介役だけでなく、森自身もスペンサーに日本の歴史・風俗等について多くのことを教えたようである。

　森はなぜ文化・報道の活動をこんなにうまくできたのだろうか。若いころ薩摩藩の留学生として英米で教育を受けた、いわば「西洋の影響」説だけでは問題を片付けられないと思う。「侍の国際人」であった森にとっては、薩摩藩の典型的侍の強い自我意識や自尊心こそが、心理的な面において、西洋人との平等的かつ対等の付き合いへの道を開けてくれた理由の一つであったと思う。また、森が国際関係の中に占める文化の比重をよく見抜いて文化活動に全力を捧げた理由には、愛国心や職務への忠誠も重要であったに違いない。日米の幅広い文化交流のベースを敷くために、森は一八七二年にスミソニアン国立博物館長J. Henry教授と図って、米国議会に向かって、長州藩の下関外国艦船砲撃(一八六四)に端を発した「下関償金」の返還を求め、それによって東京に西洋の文化、ワシントンに日本の文化を紹介する学校等の施設の設立を提案した。米政府は、森の提案とは無関係に、一八八三年にこの償金を一応日本に返還したが、こういった偉大な構想をいだいていた当時の森は、あたかも今筆者が勤めている日米友好基金の予言者のようなものに見える、といってもよかろう。

参考文献：大久保利謙編「森有礼全集」宣文堂書店　一九七二。Ivan Hall著「Mori Arinori」ハーバード大学出版会　一九七三。

国立劇場ニュース

■文楽公演（小劇場）

近松名作集

第一部　冥途の飛脚　十一時半開演
第二部　曽根崎心中　三　時　開演
第三部　心中天網島　五　時半開演

二月十四日～三月一日
（二十二日より一部・三部入替え）

●かいせつ

二月の文楽は国立劇場では初めて三部制を試みる。生活が忙しくなるにつれて観劇の時間も余り長いのは喜ばれない傾向が目立っている。文楽や歌舞伎はもともと一日がかりで上演するように出来ているので、全く逆の立場にあるわけだが、時代の要求は無視できない。そこで、なるべく〝通し〟を原則とする当劇場の方針を守りつつ、短い時間で満足していただく理想的な演目として、近松世話物の代表作三本を取り上げた。

第一部「冥途の飛脚」

梅川忠兵衛でお馴染みの名作で、〝淡路町〟〝封印切〟〝道行〟と通す。淡路町は八右衛門の借金の催促に困った忠兵衛が母の手前を繕うおかしみがおもしろいが、当時の飛脚屋のリアルな生活描写に近松の特色が見られる。後半の通称羽織落としは人形の見せ場。女にひかれて知らず知らず廓に足が向く忠兵衛の姿を描く。眼目の〝封印切〟は、もちろん八右衛門に対する意地から忠兵衛がお屋敷の金の封印を切ってしまう場面がクライマックスだが、傍らで気遣う梅川の姿が哀れに印象深い。〝道行〟は従前の松之輔作曲の台本でなく、原作どおりの古い曲によるので、近松の味がより色濃く出るだろう。

第二部「曽根崎心中」

「曽根崎心中」

近松世話物の第一作として文楽史上でも重要な作品であり、代表的名文の道行の一節は教科書にも取り入れられている。〝生玉〟〝天満屋〟〝天神森〟とストーリーが明快でわかりやすいこともあって、近年の復活曲にもかかわらず人気狂言のトップに立っている。それだけに演出的にも磨きがかかり、伝統的な古典の名作に劣らぬ完成が見られ、海外公演でも喜ばれた。この作品の見どころは何といっても〝天満屋〟で縁の下にひそむ徳兵衛に対してお初が爪先で合図して死の覚悟を促す場面から、段切に二人が闇にまぎれて脱出する緊迫感であろう。床と人形の三位一体の文楽芸術の楽しさを充分味わっていただきたい。

第三部「心中天網島」

妻子ある男が遊女にひかれ破滅の淵に追い込まれていく過程を描いて、近松の最高傑作との評価もある。現行の上演では〝河庄〟だけが後年の改作によっているが、ストーリーの展開上はさほどの異和感がない。恋に狂う治兵衛、義理に迫られて心にもない愛想づかしをする小春、弟を思い女の真情を知って涙する孫右衛門、三人それぞれの立場が心憎く活写される。〝紙屋内〟から〝大和屋〟は原作どおりで大正期の作曲であるが、十分に研究して復活されただけに、いかにも近松らしい気分に溢れていて、とくに〝大和屋〟は屈指の名曲といえる。

各部とも得意曲、初役など多彩な配役での競演が興味深い。

■雅楽公演（小劇場）

伶楽「曹娘褌脱」長秋横笛譜より

――竹・石・陶の楽器のさまざまな音色の表現――　二月十日

■演芸（演芸場）

定席・上席　二月一日～十日
定席・中席　二月十一日～二十日
花形新人演芸会　二月二十一日
宝井馬琴独演会　二月二十七日

編集後記

○我が国は、これまで欧米諸国から知識や技術を吸収することに急であって、我が国に対する諸外国の理解を深める努力に欠けるきらいがあったと言われる。ホール氏の森有礼についての論文をみると、外交の濫觴期といえる時代に、森のこのような活躍があったことは案外知られていないのではなかろうか。

○日米友好基金は、日米両国民の相互理解を深めるための研究活動を援助しているが、ホール氏自身大へんな日本研究家とうかがっている。巻頭論文の漢字を駆使した流暢な日本語の文章には全く敬服した次第です。

○井上靖氏の「私と中国の歴史」は、昨年の文部省幹部職員懇談会における講演を要約したものである。今年も各界で活躍しておられる方々の文化論などをできるだけたくさん掲載していきたいと思っています。（O）

広告の問合せ・申込み先
株式会社　ぎょうせい　営業課
TEL（〇三）二六八－二一四一（代表）

「文化庁月報」一月号
（通巻第一四八号）
昭和56年1月25日印刷・発行
編集　文化庁
〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所　株式会社　ぎょうせい
本社〒104東京都中央区銀座7丁目4番12号
営業所〒162東京都新宿区西五軒町52番地
電話（〇三）二六八－二一四一（代表）
振替口座　東京　九－一六一番
印刷所　㈱行政学会印刷所
定価　一八〇円（送料四五円）
年間購読料　二、一六〇円（送料共）